

「オタク的気質と双極性障害の相関関係について」

1190547 南 沙織

高知工科大学経済・マネジメント学群

1. 序論

「おたく（多く片仮名で書く。仲間内で相手を『御宅』と呼ぶところからの称）特定の分野・物事には異常なほど熱中するが、他への関心が薄く世間との付き合いに疎い人。また広く、特定の趣味に過度にのめり込んでいる人。『アニメ——』（広辞苑 第七版 2018）

上記のように「おたく」という言葉は今や広辞苑に載るほど浸透した言葉である。一昔前まではネガティブなイメージの強かったこの言葉も、今やひとつのパーソナリティとして社会に溶け込んでいる。その結果、漫画やゲームなど二次元に没頭する人だけでなく、広く趣味に没頭する人のことを指す言葉となった（東，2001；宮台，2014）。その変遷の中で「おたく」と片仮名で表記されることよりも、片仮名で表記される機会が多くなったため、本研究においても「オタク」という呼称に統一する。広辞苑でも得意分野と他への関心の差が取り上げられるように、オタクの特徴として気分の上がり下がり激しいことが挙げられる。例えばゲームオタクならばゲーム内の勝敗やカードのレアリティ、アイドルオタクならば好きなアイドルのライブの当落で一喜一憂する。この特徴に似通った精神的症状を持つのが双極性障害である。

1-1. 双極性障害について

双極性障害とは、精神疾患のひとつであり、うつ病とほぼ同じ症状を持つうつ状態と、対極である躁状態をくりかえす慢性的な病気である（厚生労働省，2019）。

症状の代表として

・うつ状態

毎日の抑うつ気分、喜びの著しい減退、体重減少または増加、不眠または過眠、落ち着きがなくなる、気力の減退 など

・躁状態

気分が異常かつ持続的に高揚し、開放的または易怒的になる、自尊心の肥大、睡眠欲求の減少、多弁、考えがせめぎ合う、注意散漫 など

といった症状がある（APA，2013 高橋・大野監訳，2014）。

（これに症状の期間を合わせて診断する）

その中でも躁状態の程度は二つに分類される。一つ目が家庭や仕事に重大な支障をきたし、入院が必要になるほどの激しい状態になる「躁状態」。二つ目は他人から見ても明らかに気分が高揚していて、普段より調子がよいため、本人も周囲もそれほどは困らない程度で「軽躁状態」という。この二つの分類によって、双極性障害自体も二つに分類される。うつ状態に加えて激しい躁状態が起こる双極性障害を「双極 I 型障害」、うつ状態に加えて軽躁状態が起こる双極性障害を「双極 II 型障害」という。双極性障害は、何度も躁状態とうつ状態を繰り返す中で、人間関係に支障をきたし、他人からの信頼や信用を失ってしまう危険がある。そのため双極性障害は患者の人生に多大な影響を及ぼす、重大な疾患であると認識されている。原因はまだ解明されていないが、脳やゲノムなど身体的な側面が強い病気だとされている。ストレスも誘因や悪化要因になるが、単なるこころの病ではない（厚生労働省，2019）。このことから分かるように、オタクであるということは双極性障害の原因あるいは結果ではない。本研究では双極性障害の特徴がオタクと呼ばれる人々にも見られる特徴ではないかということ調べる。言い換えれば、双極性障害の症状という観点からオタクを調べることでオタクの性格特性を明らかにすることが本研究の目的である。

1-2. オタクに関する研究

菊池(2000)はオタクには二つのステレオタイプがあると示した。社会的スキルの欠如といったようなネガティブな面と、知識が豊富であるというポジティブな面である。その中でも菊池(2000)はネガティブな面に着目し調査した。その結果「社会的内向」や「孤独志向」などオタクステレオタイプのネガティブな面と社会的スキルは有意な負の相関を示したが、「趣味への没頭」という項目では社会的スキルと

弱い正の相関を示した。このことから、趣味に没頭する人ほど社会的スキルは低下せず、ステレオタイプの持つ「社会的スキルの欠如」は必ずしも当てはまらない結果となった。しかし、社会的スキルの有無を調査する際に想定された「他人」が広く一般の社会的他者なのか、同じオタク仲間なのかといった判断はできない結果であった。

その後の菊池・金田・守(2007)の研究でもオタクの持つネガティブなイメージについて調査がなされた。前記した菊池(2000)の研究ではアンケート参加者の中でも男女とも60%以上の人がオタクと言われると不愉快に感じると回答していた。しかしその後の菊池ら(2007)の研究では、評価段階は異なるものの約37%の人しかオタクと呼ばれることに不快感を示さなかった。この結果からもオタクと言う言葉のイメージが時代とともに変化していることがわかる。

これらの研究ではオタクの持つネガティブなイメージと実際のイメージの差について検証しており、オタクの性格特性については触れられていない。そこで本研究ではオタクの持つ性格特性のひとつ「気分の浮き沈み」に着目し、これまでに検討されてこなかったオタク像を明らかにする事を目的とする。

2. 仮説

現在アニメやゲームに特化したオタクだけではなく、趣味に没頭する人を一般的にオタクと呼ぶようになっている。そして趣味にのめりこめばのめりこむほど、その人の気分の浮き沈みは大きくなるだろう。アイドルオタクに例えるならば、ライブのチケットが当たれば大きな喜びになり、外れれば大きく落ち込む原因となる。そのほかにも、好きなアイドルが突然引退ともなると、仕事を休むほど落ち込む人がいる。このような気分の大きな浮き沈みはオタクの特徴のひとつと考えた。そして双極性障害は躁状態と鬱状態を繰り返す病気である。躁状態のときは気分が高揚し、鬱状態のときはふさぎ込んでしまう。この気分の浮き沈みは、オタクの気分の浮き沈みと似通っていると考えられる。そのため、オタクの程度が高く、趣味に没頭している人ほど、双極性障害のような気分の波を感じる可能性がある。これらより、オタク的気質と双極性障害の鬱傾向と躁傾向の両方は正の相関をするのではないかと考えられる。

仮説：オタク的気質の程度の高さは、双極性障害の躁傾向と鬱傾向の両方と正の相関が見られる

3. 方法

3-1. 調査対象者

2018年11月に実施し、質問紙配布対象者は高知工科大学と高知県立大学の学生108名(男性46名、女性62名)であった。参加者は実験室に集まり、数十分ほどの質問紙に回答し、他の実験と合わせて1000円の報酬を受け取り退室した。調査は数名の組に分かれて行われた。

3-2. 質問紙の構成

質問紙は4つのパートに分かれており、**1**と**2**は参加者のオタク度合いを調べるパート、**3**と**4**は参加者の双極性障害の度合いを調べるパートとされた。

1では参加者がどれくらいオタク的であるかを調べるため、おたく態度尺度(菊池, 2000)を使用した。しかし菊池(2000)の尺度は、漫画やゲームオタクに特化していたため、そのような項目は削除した。また菊池(2000)の研究において、オタクの社会的スキルの欠如というステレオタイプは、趣味活動に熱中している人ほど低下しないという傾向があり、オタクのステレオタイプとしてはあてはまらなると示されている。そのため、「他人と話すことは苦手である」や「部屋にこもるのは嫌いだ」といった項目も削除した。その代わりに趣味への熱量を測るものとしてQ15「趣味が生きがいである」、Q16「趣味のためなら多少の我慢は厭わない」、Q17「趣味のおかげで毎日が楽しい」を新たに作成して追加した。これらの項目で構成される**1**を本研究ではオタク尺度と名づける。

2はオタクの特徴の一つである、物事に対する情熱や没頭する傾向を調べるため、Grit 尺度(Angela Duckworth, Ph. D., 2016 神崎訳, 2016)を使用した。

3は双極性障害の躁状態を調べる項目とされたが、双極性障害を測定する尺度が見つけられなかったため、DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引(APA, 2013 高橋・大野監訳, 2014)より躁状態の症状を尺度化し、躁状態の程度を測定する項目とした。

④はベック抑うつ尺度(Beck et al., 1961 ; 1979 林・瀧本訳, 1988a ; 1991)を使用し、鬱状態を測定した。

Grit 尺度については質問紙の②の 1. から 10. を Q18 から Q27 として分析を行った。また躁尺度は質問紙の③の 1. から 12. を Q28 から Q39 として分析を行い、鬱尺度は質問紙の④の第一問から第二十一問を Q40 から Q60 として分析を行った。

①、②、③は5件法 (1. あてはまらない～5. あてはまる) で回答させた。④は4件法をとっており、点数が高いほど症状が重くなるよう構成されていた。

4. 結果

全てのデータはHAD を用いて統計分析を行った(清水, 2016)。

因子分析の結果を元に相関分析を行った。

4-1. 各尺度の因子構造

①オタク尺度

最尤法を用い、回転なしで因子分析を行った。Q8 から Q14 はどの要因にもまとまらなかったため削除し、残りの 10 項目で因子分析を行ったところ、1 因子構造が確認された (表 1)。

表 1. オタク尺度に対する因子分析結果

項目	Factor1	共通性
Q15	.747	.558
Q17	.739	.546
Q16	.726	.526
Q6	.667	.445
Q1	.653	.427
Q7	.591	.349
Q2	.586	.343
Q5	.579	.336
Q3	.579	.335
Q4	.534	.285

②Grit 尺度

最尤法を用い、プロマックス回転(Power = 4)、カイザーの基準化ありで分析を行った。Q18 と Q22 はどの要因にもまとまらなかったため削除し、残りの 8 項目で分析をした (表 2)。Factor1 は「私は勤勉だ。絶対にあきらめない」や「私は努力家だ」といった項目で、物事に対

する粘り強さを示していたため、「粘り強さ」と名付けた。また Factor2 は「アイデアやプロジェクトに夢中になっても、すぐに興味を失ってしまったことがある」や「目標を設定してもすぐ別の目標に乗り換えることが多い」といったような、ひとつの目標から興味が移ってしまう程度を示していたため、「移り気」と名付けた。しかし Factor2 は逆転項目であったため、値を逆転させて平均値を算出し、改めて「情熱」と名付けて以下の分析に使用した。

表 2. Grit 尺度に対する因子分析結果

項目	Factor1	Factor2	共通性
Q25	.954	.149	.853
Q21	.753	-.035	.583
Q23	.695	-.075	.518
Q19	.524	-.053	.292
Q27	.419	-.069	.196
Q26	-.090	.828	.735
Q20	.064	.654	.408
Q24	-.046	.498	.263

③躁尺度

最尤法を用い、回転なしで因子分析を行ったところ 1 因子構造が確認された (表 3)。

表 3. 躁尺度に対する因子分析結果

項目	Factor1	共通性
Q38	.749	.561
Q35	.628	.394
Q33	.617	.381
Q36	.580	.337
Q30	.580	.336
Q34	.573	.329
Q28	.526	.277
Q32	.437	.191
Q39	.399	.159
Q31	.348	.121
Q29	.339	.115
Q37	.318	.101

④鬱尺度

最尤法を用い、回転なしで因子分析を行った。Q58 がうつ症状による体重の増減を問う問題であったが、ダイエットによる体重の減少との

区別がつけられないため、項目を削除した。その結果、残りの 20 項目の平均値を用いて分析を行った (表 4)。

表 4. 鬱尺度に対する因子分析結果

項目	Factor1	共通性
Q46	.751	.563
Q53	.643	.414
Q41	.631	.398
Q56	.588	.346
Q47	.580	.337
Q52	.577	.333
Q54	.577	.333
Q49	.568	.323
Q48	.565	.319
Q45	.557	.310
Q40	.555	.308
Q43	.513	.263
Q42	.503	.253
Q44	.495	.245
Q50	.421	.178
Q51	.376	.142
Q55	.345	.119
Q60	.322	.104
Q59	.192	.037
Q57	.077	.006

4-2. 各因子の相関

各尺度を因子分析した結果を、因子ごとに平均値を算出し、相関分析を行った。

表 5. 相関分析

	オタク尺度	粘り強さ	情熱	躁尺度	鬱尺度
オタク尺度	1.000				
粘り強さ	.139	1.000			
情熱	-.054	.256 **	1.000		
躁尺度	.197 *	.100	-.495 **	1.000	
鬱尺度	.099	-.268 **	-.117	.085	1.000

相関分析の結果 (表 5)、オタク尺度は躁傾向と有意な正の相関を示した ($r = .20, p < .05$)。このことからオタク傾向のある人は、注意が散漫になったり、気分が上がりやすくなったりする躁傾向があるということが示された。一方、粘り強さ ($r = .14, n. s.$)、情熱 ($r = .05, n. s.$) 鬱尺度 ($r = .10, n. s.$) は有意な相関が見られなかった。

次に、Grit 尺度の粘り強さ傾向は情熱傾向と有意な正の相関を示した ($r = .26, p < .05$)。このことから粘り強い人はひとつの物事に継続的に取り組むということが示された。一方、鬱傾向とは有意な負の相関を示した ($r = -.27, p < .05$)。このことは粘り強い人は鬱傾向が低いということを示している。残りの躁傾向 ($r = .10, n. s.$) は有意な相関が見られなかった。

また同じ Grit 尺度の情熱傾向は躁傾向と負の相関を示した ($r = -.50, p < .05$)。これはひとつの物事に継続的に取り組むことのできる人は躁の傾向が低いということを示している。鬱傾向とは有意な相関は見られなかった ($r = -.12, n. s.$)。

そして躁傾向と鬱傾向にも有意な相関は見られなかった ($r = .09, n. s.$)。

これらの結果としてオタクな人は躁傾向が高いということが示された。

これら、オタクな人は気分が上がりやすいということが示された。これは、オタクな人がそうでない人よりも、自分の気持ちが上がったときのことをよく覚えているからではないかと考えられる。普段の生活で自身の気持ちが上がったときというのを鮮明に覚えているということは難しいかもしれないが、オタクな人は自分の好きな趣味に関連することであるため、より気分が上がりやすく、より記憶しているのではないかと考えられる。

5. 考察

結果より、オタクな人は躁傾向が高いということが示された。このことから、オタクな人は気分が上がりやすいということが示された。これは、オタクな人がそうでない人よりも、自分の気持ちが上がったときのことをよく覚えているからではないかと考えられる。普段の生活で自身の気持ちが上がったときというのを鮮明に覚えているということは難しいかもしれないが、オタクな人は自分の好きな趣味に関連することであるため、より気分が上がりやすく、より記憶しているのではないかと考えられる。反対に鬱尺度と相関が見られなかったことには、尺度が参加者のその時の状態を聞いていることが関係している可能性がある。躁尺度は「普段よりも気分が高揚し、開放的になる日がある」といったように、今までにそういった経験があったかということを開く質問で構成されていた。一方、鬱尺度は「私は落ち込んでいない」といったように、回答している時にその人がどういう状況にあるかということを知っていたため、質問紙に答えた時に鬱になっていなければ、鬱傾向が出ないようにしてしまったのではないかと考える。本研究の目的としては、双極性障害の症状とオタク気質の相関を調べ、その類似性から新たなオタク像を明らかにすることであった。そのた

め、参加者が回答している時に鬱であったかということよりも、鬱のような状態になったことがあるかということを知ることで、再度検討する必要があるだろう。

鬱尺度と相関が見られなかったことから、オタクな人の特徴と言えるのは気分が上がりやすいということだということが示された。

本研究ではオタクの特徴である一つのことへの熱中度合いを調べるために Grit 尺度を使用した。オタク尺度との相関が見られなかった。本研究では、趣味への情熱はオタクの性格特性と捉え、それを測る尺度として Grit 尺度を使用した。しかし相関が見られなかったということは、オタクの特徴として捉えていた「情熱」と、Grit 尺度の測る事のできる「情熱」に違いがあった可能性がある。Grit 尺度が測ることのできる「情熱」とはひとつのことに専念することである。同じ目標に対し、どれだけ継続的に取り組んでいるかを問うている上、質問項目は「アイデア」や「プロジェクト」など、仕事や課題を連想させる言葉が使用されていた。そのことから、参加者は自分の仕事や課題、あるいは困難に対する取り組み方を想像して回答した可能性がある。しかしオタクの特徴として考えていた「情熱」は、自分の好きなものに対し、どれだけ熱を持って向き合っているか、没頭しているか、という意味での「情熱」を想定していた。そのため、実際には趣味活動に全力で取り組んでいる人でも、普段の自分の仕事への取り組み方を想像して回答してしまい、その結果、オタクの程度と Grit 尺度には相関が見られなかった可能性が考えられる。

今回 Grit 尺度を使って参加者の「情熱」と「粘り強さ」を計測した結果、この二つには相関が見られた。このことから Grit 尺度が測ることができる「やり抜く力」を妥当に測ることができたと考えられる。しかし相関係数の値は小さいため、改善の必要があるとも考えられる。

躁尺度と情熱の程度に負の相関があったことで、今回自作した躁尺度が適切に躁の程度を測定していたと考えられる。情熱を測る尺度は「目標を設定してもすぐ別の目標に乗り換えることが多い」や「興味の対象が大きく変わる」といったようなその人が移り気な人であるかどうかを問う質問で構成されていた。情熱を持って物事に取り組む人は目標や興味の対象を頻繁に変えることはないと思われる。躁の項目には「考えが次々と溢れ出てまともなくなることがある」や「ひとつのことをしていても注意がすぐに他に移ってしまうことがある」と

いったような躁傾向の注意散漫になってしまう場面を測定していたため、この二つがその人の移り気な面を測ることとなり、情熱の傾向が高い人は躁傾向が低いという結果になったと推測される。躁の特徴には移り気なところが含まれている。従って適切に躁の程度が測定されていれば、移り気（情熱）と相関すると予測されており、そして今回情熱の程度と躁尺度には中程度の負の相関がみられた。そのため今回の躁尺度は適切に躁の程度を測定していたと考えられる。

6. 今後の課題

本研究では菊池（2000）の尺度を修正することで、より現代のオタクたちを広く調べようとした。しかし、現代の「オタク」という言葉が示すオタクは一つの定義で括ることのできる範囲ではない可能性がある。「オタク」と一言と言っても対象にお金を使わない人もいる。この点において、現代において「オタク」という言葉がどのようなことを指すのかという定義を改めて考え直したうえで、新たな尺度を作成することが必要ではないかと考えられる。

また、双極性障害に似た症状があったかどうかということ調べる研究にも関わらず、参加者が回答している時の状況を問うものと、それまでにそういった症状があったかという経験を聞く尺度を使用してしまった。このことから、改めて尺度を考え直す、または聞く時点を統一することが必要だと考えられる。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). 高橋三郎・大野裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の分類と手引 61-87 医学書院
- Angela Duckworth, Ph.D. (2016). やり抜く力 人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける 神崎朗子訳 (訳) ダイヤモンド社
- Beck et al. (1961 ; 1979). 林 潔・瀧本孝雄 (訳) (1988a ; 1991) ベック抑うつ尺度
- 堀 洋道 (監修) 松井豊 (編) (2001). 心理測定尺度集III 心の健康をはかる (適応・臨床) サイエンス社 140-146
- 東 浩紀 (2001). 動物化するポストモダン オタクから見た 日本社会 講談社

- ・菊池 聡 (2000). 「おたく」ステレオタイプと社会的スキルに関する分析 人文科学論集 人間情報学科編 信州大学 34, 63-77
- ・菊池 聡・金田茂裕・守 一雄 (2007). FUMIE テストを用いた「おたく」に対する潜在的態度調査 人文科学論集 人間情報学科編 41, 105-115 信州大学
- ・広辞苑 第七版 (2018). 岩波書店 p418
- ・厚生労働省 (2019年2月5日). 知ることからはじめよう
みんなのメンタルヘルス総合サイト
https://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/detail_bipolar.html
- ・宮台 真司 (2014). オタク的想像力のリミット 〈歴史・空間・交流〉から問う 筑摩書房
- ・清水裕之(2016). フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.